

## 「物質化した都市」を再生するための緑の活用法

The Way of Utilization of Green for Regenerating 'City as Inorganic Matter'



株式会社チームネット 代表取締役  
President of TeamNet co., Ltd.

甲斐徹郎  
Tetsuro Kai

かつての日本の住まいは、地域全体の「環境」との一体感を保っていました。そのことは、伝統的な集落の美しい街並みを見れば、一目瞭然です。それは、かつての住宅には、自らの生活を外界と切り離して成立させる術がなかったため、外界との「つながりあう」技術が洗練され、あの美しい街並みが生みだされてきたのです。そして、そこに住まう人々にとって、地域の環境は共通した生活基盤そのものでした。こうした共通の利害に結びついた地域の環境を整え合う関係が、地域のコミュニティを機能させてきたのです。

ところが、高度成長期以降、日本の住まいは、進化した技術で装備され、室内に閉じこもり、スイッチひとつで快適さを得ることのできる生活が可能になっていきました。その結果、都市を構成する個々の住まいは、自己完結化してしまい、こうした「関係」の欠如が、都市の構造を大きく変えてしまうこととなります。「関係」は、個々の暮らしの単位を生きた細胞のようにふるまわせ、そのふるまいが生命を有したような有機的な全体を形成しますが、「関係」が欠如してしまった状況では、都市は無機的な「物質」と化してしまうのです。

このように、技術の進化により住まいの自己完結性が高まると、暮らしの場における周辺的环境や人と「関係」を保つことの必然性が失われ、その「関係」の欠如が、都市全体の物質化を招くと考えることができます。すなわち、「環境問題」と「コミュニティ問題」の本質は、個々の暮らしの単位での相互の「関係」の欠如による「都市の物質化」が引き起こしたものだと言えます。「都市の物質化」を変容させ、都市環境を再生させるためには、全体を構成する個体間の「関係」を再生させることが重要となります。

では、「関係」の再生をどのように進めるか。こうした文脈で、私が取り組んでいるのが、「環境共生」

というコンセプトによる事業です。たとえば、私が取り組む集合住宅事業において「関係」を暮らしの中に再登場させるための手法は、「微気候」をデザインするというものです。「微気候」とは、屋敷林や川などのその場所の条件によって生まれる局所的な気候のことをいいます。こうした微気候を意図的に形成するように共用部の緑環境を整備し、さらに外環境と室内空間とのつながりを丁寧にデザインすることで、クーラーなしでクーラー以上に快適な室内環境を形成するのです。

こうした住環境は、単にクーラーなしの快適さを住人に対して提供するだけでなく、結果として住人同士の「関係」を育むこととなります。それは、各住人の生活のレベルを高める共用部の緑環境が、共有価値となるからです。そこに、共有価値を介した住人同士の「関係」が生まれるのです。

こうした「環境共生」の手法を既存の街中でも応用する試みが、公益財団法人東京都公園協会による「まちなか緑化活動支援事業」(※)として平成20年度より進められ、大きな成果を上げつつあります。

それぞれの事業で、重要な役割を果たしているのが、「緑」の存在です。私は、「緑」を人と人との「関係」を再構築するツールとして活かしています。古来から人間は快適さを求めて「緑」と寄り添って暮らしてきました。都市における「環境」と「コミュニティ」の再生の決め手は、この緑の潜在力を顕在化させ、「物質化した都市」に生命を吹き込むことだと思えます。

(※) <http://machinaka.tokyo-park.or.jp/>